

平成23年9月

大塚美樹 学位論文審査要旨

主査 紀川純三
副主査 吉岡伸一
同 萩野浩

主論文

Self-perceived burden in patients with cancer: Scale development and descriptive study

(がん患者の他者への負担感：尺度開発および記述的研究)

(著者：大塚美樹、最上多美子、萩野浩)

平成23年 European Journal of Oncology Nursing 掲載予定

学 位 論 文 要 旨

Self-perceived burden in patients with cancer: Scale development and descriptive study

(がん患者の他者への負担感：尺度開発および記述的研究)

我が国では高齢化率の上昇に伴いがん患者やがんによる死亡者数は増加の一途をたどっている。多くのがん患者は家族からのサポートを必要とし、家族に負担をかけていると感じている (self-perceived burden: SPB)。SPBの認知が患者のQOLを低下させることが報告されているが、SPBに焦点をあてた調査は少なく、我が国においてはがん患者のSPBを評価する尺度は存在しない。そこで、アメリカのがん患者において有用性が確認されたSPB scale (SPBS) の日本語版を作成することは、日本人がん患者のSPBが測定可能となるとともに国際比較が可能となると考えた。本研究の目的は、SPBS日本語版の開発を試み、その信頼性・妥当性について検討するとともに、日本人がん患者のSPBの特徴を明らかにすることである。

方 法

SPBS日本語版原案の作成については、順翻訳、翻訳の統一と質の評価、逆翻訳、予備調査の手順を踏み内容・表面妥当性を確認した。SPBSは合計25項目（短縮版10項目）で構成され、質問項目に対する回答は5段階で、負担感を強く感じている者が高得点となる。

次にSPBS日本語版を用いて調査を行った。調査期間は2009年7月から12月で、外来通院中で20歳以上の固形がん患者310名を対象とした。調査内容は、SPBS、Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp)、General Health Questionnaire-12 (GHQ-12)、年齢、性別、社会的背景（雇用状況、婚姻状況、家族構成、主介護者、主介護者の性別、主介護者の年齢、主介護者の雇用状況）、身体的・医学的背景（がんの部位、performance status (PS)、罹患期間、治療の種類、併存疾患の有無）とした。調査は自記式質問紙により実施し、郵送・回収した。尺度の信頼性、妥当性の検討として、項目分析、探索的因子分析を行った。SPBS、FACIT-Sp、GHQ-12の得点の比較には一元配置分散分析 (ANOVA)、および多重比較を行った。

結 果

本調査の回収調査票数は226名（回収率72.9%）で、有効回答数210名（67.7%）を分析対象とし、対象者の平均年齢は、 64.6 ± 12.0 歳（24～90歳）、男性105名、女性105名であった。探索的因子分析および主成分分析を行った結果、最終的に18項目1因子モデルとなった。18項目には短縮版10項目のうちの9項目が含まれ、18項目と9項目との間には相関があった。尺度の信頼性を示すクロンバック α 係数は、18項目が0.968、9項目が0.937であった。基準関連妥当性について、SPBS、FACIT-SpおよびGHQ-12との間に有意な相関を示した。なお、SPBS18項目の平均得点は 41.2 ± 18.2 、SPBS9項目の平均得点は 21.1 ± 9.4 であった。PSの悪化によりSPBS得点とGHQ得点は高くなり、FACIT-sp得点は低下した。家族構成においては夫婦の2人暮らしは家族と同居している者に比べSPBS得点とGHQ得点が高くFACIT-sp得点は低下した。罹患期間が1年未満および10年以上の場合は1年以上5年以下に比べSPBS得点は高値を示した。主介護者が子供である場合は配偶者および両親の場合に比べSPBS得点は低値を示した。

考 察

本研究では、SPBS 日本語版の信頼性および妥当性が確認された。SPBS日本語版は18項目（短縮版9項目）で構成される。18項目と9項目との間に相関がみられたことから短縮版の使用が臨床において活用しやすく、評価のツールとして活用されることが期待される。

がん患者のSPBは、PS、疾患期間、家族構成、主介護者に影響を受けていた。長期のケアはSPBを高めることが報告され、本研究においても確認された。さらに、SPBは罹患期間が1年未満の患者においても高い点も明らかとなった。また、主介護者が両親の場合にSPBが高く、子供の場合に低い理由として、我が国では子供が両親の世話をすることが伝統となっていることが考えられる。SPBS日本語版の得点が西洋諸国の報告と同程度の結果を示し、かつQOLに影響を及ぼすことが明らかとなった。SPBS日本語版によって、がん患者の他者への負担感の把握が可能となり、看護介入につながることを示唆された。

結 論

SPBS日本語版の信頼性・妥当性が確認され、その有効性が示された。日本人がん患者の他者への負担感にPS、疾患期間、家族構成、主介護者に影響を受けていた。